



Title	英語の挿入語句について : On English Parentheticals
Author(s)	舟阪, 晃
Citation	大阪外大英米研究. 1983, 13, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99060">https://hdl.handle.net/11094/99060</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 英語の挿入語句について

## On English Parentheticals

舟 阪 晃

### 0. は じ め に

本稿の目的は、英語の挿入語句(Parentheticals)について、その特徴と、挿入場所に関する制限という二つの点から、考察を加えることである。先学の研究のうち、Emonds(1976)とBanfield(1982)の考え方を中心に、それぞれの問題点を克服する方策を探求したい。

### 1. 資 料

書き言葉の場合、いつでもではないが多くの事例で、コンマが挿入語句の信号に使われている。話し言葉の場合、コンマに対し音調の変化やポーズが対応するのであるが、ここでは主に書き言葉を観察の対象とする。挿入語句が文頭にあるときは、その直後に、文尾にあるときは、その直前に、また、文中にあるときは、その前後に、それぞれコンマが置かれる。コンマによって、挿入語句が、「主節」—挿入語句が挿入される母型(matrix)構造—とは異なった地位をもつということ、いいかえれば、主節の「外位置」を占めるということが表現されている。「外位置」というのは、すでに遂行副詞(Performative adverb)との関係で考察した<sup>①</sup>ごとく、話し手や聞き手と密接な関係をもつ位置である。挿入語句を用いることにより、話し手は、何らかの意味で「ふつうでない」効果を意図しているといえる。このような観点からすれば、挿入語句は、言語知識(Competence)というよりは言語運用(Performance)、または、発話行為(Speech acts)に近いものといえよう。

さて、挿入語句という術語がどういう現象を表わしているかは、かならずしも明確ではないので、一応、挿入的と見做しうる実例をつぎに列挙しておく。

---

① 拙稿(1978)。

- (1) (a) That's what they mean by improving the railways, *I suppose*. [FR 50]②  
 (b) Oratory is very frightening, *you know*. [FR 108]  
 (c) Well, Mr. Cust, my congratulations, *I'm sure*. [ABC 151]  
 (d) And why, *thought Sir Stafford*, do I include South America? [FR 39]  
 (e) "That audience," *said Sir Stafford Nye*, "most of them, nearly all of them, I should say, are real lovers of music. [FR 89]  
 (f) What can you tell us, *Doctor*, about this business? [NIL 103]  
 (g) Do I have to buy myself a wig, *if they sell such a thing*, at the counter? [FR 19]

挿入語句の先学の研究は、圧倒的に、(1a)の形のものに集中している。挿入語句の主語は *I* で、その動詞は *think*, *believe*, *suppose* 等、話し手の主節に対する判断・評価・態度等を表わすもので、時制は現在である。しかし、実際に資料を集めてみると、他にも考察を加える必要があるものがでてくる。もちろん、結果として、挿入語句に入れない方がよいものもあるが、一応現時点では広く資料を観察するのが得策であろう。

(1b) では、挿入語句の主語が二人称、時制は現在、(1d) では、主語が三人称、時制が過去になっている。また、(1c) では、主語が一人称、時制は現在であるが、挿入語句と主節との関係が統語上間接的である。(1e) は直接話法の例、(1f) は呼格の例であるが、この二者の場合は、挿入語句そのものの特徴よりも、主節のどの部分への挿入が認められ、また、認められないか、に興味がもたれる。さらに、筆者の考え方によれば、挿入の *possibility* から一步進めて、その *probability* にも言及する必要があるといえる。最後に、(1g) は、挿入というよりは移動という概念でとらえられるべきものであろうが、移動可能な場所については、挿入可能な場所との対比において考察される必要があろう。

---

② 資料に対する略符号については最後の "Data" を参照のこと。

以上の観察によって、挿入語句は二つの観点から検討される必要があることがわかる。第一は、挿入語句はどういうもので、どういう特徴をもっているかということ、第二は、挿入語句が主節に挿入される場所については、どういう制限があるかということ、である。

## 2. 挿入語句についての先学の解釈

### 2.1. Ross (1973)

(2) (a) I  $\left\{ \begin{array}{l} \text{think} \\ \text{don't doubt} \end{array} \right\}$  John came later than Sue.

(b) John came later than Sue,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{I think.} \\ \text{I don't doubt.} \end{array} \right\}$

(3) Slifting

$$\begin{array}{ccccccccc}
 & & X - ({}_s Y - ({}_s \text{that} - S) {}_s) {}_s - Z & & & & & & \\
 \text{SD : } & 1 & & 2 & & 3 & & 4 & & 5 & & \xrightarrow{\text{OPT}} \\
 \text{SC : } & 1 & 4 & \# & ({}_s & 2 & & 0 & & 0 & ) {}_s & 5
 \end{array}$$

(Ross 1973 : 134)

(2b)は(2a)から、(3)の規則により派生される。第4項のSが上昇し、上位のSに対し「チョムスキー付加」されることにより、コンマとS境界との対応関係が明示的に示されている。

つぎに、問題点を上げてみよう。まず第一に、(2a)と(2b)とでは発話の力に大きい差がある。(2a)に(2b)と同じ効果をもたせるためには、*think*や*don't*に特別の強勢を置く必要がある。第二に、(3)における挿入語句の上位節点はSとなっているが、*I think*の代わりに*of course*等が生じたときは取り扱いが困難である。第三に、挿入語句の動詞がいつでも*that*節を補文とするとは限らない。本稿の(1c)の実例でもこのことは明らかである。第四に、挿入語句が、主節の中に挿入されるときは、非構成要素を動かすという重大な問題をかかえこむことになる。

以上の考察から、いわゆるSliftingで説明できる挿入語句は極く限られたも

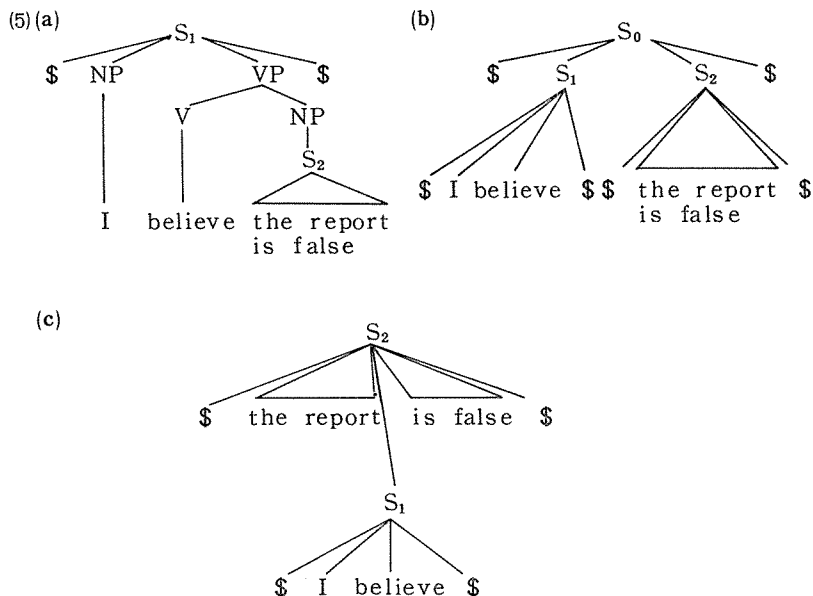
のであるといえる。

## 2.2. Downing (1973)

(4) (a) I believe the report is false.

(b) The report, I believe, is false.

(4b)は(4a)から、(5)のような順序で、派生される。



(Downing 1973 : 116f.)

(5a)から(5b)を導びく規則は補文分離(Complement detachment)規則とよばれ、(5b)から(5c)へのそれは母型文埋め込み(Matrix embedding)規則、別名、挿入(Parenthesization)規則とよばれている。後者は、一つの root S を別の root S に埋め込むもので、この規則適用以前の文法関係には何ら影響を与えない規則である(*Ibid.*, 126)。(5)における“\$”は音韻句の境界を示している。

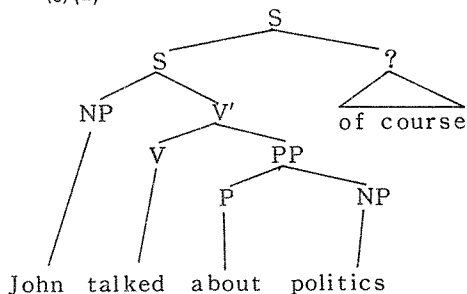
この考え方の長所は、挿入語句の前後に音韻句の境界があり、そこにコンマが

入ることが明示的に説明できる点と、(5a)から(5c)にいたる途中の段階として(5b)を認めることにより、挿入語句の扱い方をこれまでよりも精密なものにしていることである。

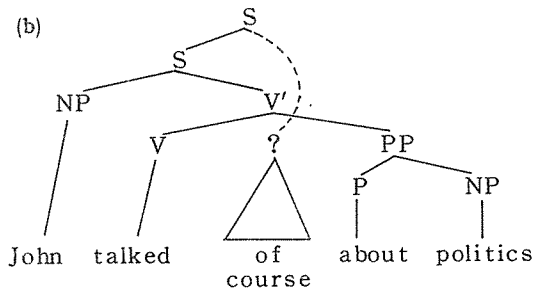
問題点としては、第一に、Slifting の場合と同様に、挿入語句の動詞が *that* 節をとるもの以外は扱うのが困難である。第二に、挿入規則の性格が明らかでない。たとえば、(5c)のように、主語と述語の間に挿入することも可能であるが、また、*is* と *false* の間に挿入することもできる。逆に、*the* と *report* との間に挿入される *probability* はゼロに近いといえる。挿入規則はこのような事実を説明できないように思える。

### 2.3. McCawley (1982)

(6) (a)



(b)



(McCawley 1982 : 95)

McCawley (1982) によれば、変形には二つの種類がある。一つは、構成要素間の統語的な関係を変えるもので、他は、統語的關係には影響を与えずに、構成要素の順序だけを変えるものである。(6a) から (6b) への派生は後者に属する規則によるもので、結果として、不連続構造が生じている。この規則は、挿入語句配置 (Parenthetical placement) 規則とよばれ、McCawley は文節部門に属する規則の一つであることを示唆している。挿入語句は、主節内の構成要素と文法関係をもっていないので、主節内の文法関係は、あたかも挿入語句がないかのように解釈される。

McCawley (1982) の考え方は、雑ではあるが、直観的にわかりやすく、また、示唆的なものであるといえる。問題点としては、第一に、(6) のなかの疑問符で表わされた節点の性格を明らかにすること、さらに、最上位の節点は、話し手や聞き手と関係の深い節点であるが、それが S でよいのかどうか明らかにすること、などが考えられる。第二に、(6b) のどの部分に挿入可能かということを明示的にのべておく必要がある。(6b) では、たまたま、*of course* は *talked* と *about* の間に挿入されているが、別の可能性もあるわけである。また、さらに一歩進めていえば、挿入場所による *probability* のちがいに言及する必要があるろう。

## 2.4. Emonds (1976)

挿入語句についての Emonds (1970) は欠陥をもっていたのであるが、Emonds (1976) ではその点が改良され、(7) のような形式化が行われている。ここでは、挿入語句は変形の結果生じるのではないという立場がとられている。

$$\begin{array}{rcccl}
 (7) & & \left\{ \begin{array}{c} \text{NP} \\ \text{AP} \\ \text{S} \\ \text{VP} \\ \text{PP} \end{array} \right\} & \text{)}_s - \{ \begin{array}{c} \text{S} \\ \text{PP} \end{array} \} & \\
 & 1 & 2 & 3 & \implies \\
 & 1 & \phi & 3 \ 2 &
 \end{array}$$

(Emonds 1976 : 49)

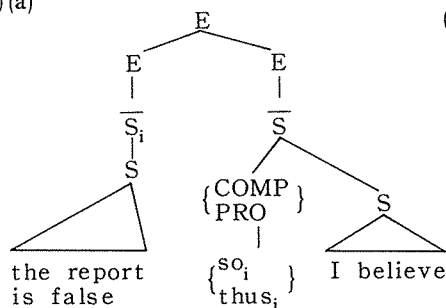
挿入語句を第三項とするのは恣意的ではあるが、そうすることにより、非構成要素の移動という難題に解決策を与えることになる。その結果として、挿入語句が主節のどこに挿入されるかということは、これまでのどのモデルよりも見事に説明できる。さらに、挿入語句の後の構成要素が焦点(focus)を成すということも明示的に示される。

つぎに問題点を調べてみよう。第一に、第二項は範疇が列挙されているが、これは、さらに一般的に、構成要素であればよいといえるのではないかと思わせる資料がある。つまり、範疇を指定すると制限が厳しくなりすぎるといえる。第二に、挿入語句を表わすSやPPには厳しい制限が必要で、それぞれの節点でカバーできる項目なら何でも入りうるというものではない。つまり、SやPPではカバーする範囲が広すぎるといえる。一方、逆に、Sの他にPPだけでは、すべての挿入語句を包括することはできないという事実もある。たとえば、McCawley (1982) のところで言及した *of course* は、一応、PPの中に入れようと思えば入れられないこともないが、Emonds が意図したであろうPPは *of course* 等は含んでいなかったと考えられる。第三に、挿入は、(7)の形式化をみる限り、純粋に統語的現象といわねばならないが、話し手や聞き手に密着したものである点、また、種々の変形の最後の、または、最後に近い段階で適用される点、に注目すると、純粋に統語的に形式化するのには無理があるといえる。

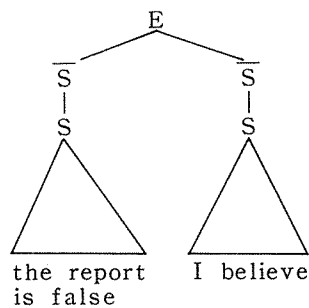
## 2.5. Banfield (1982)

挿入語句を含む構造は(8)のように派生されると考えられる。

(8) (a)



(b)



(cf. Banfield 1982 : 51)



(8a)において、挿入語句を二つのEの後の方に位置づけるのは、Emonds (1976) が下敷きになっていると思われるが、その考え方は(9)の実例により支持される。

(9) (a) “We see something you don’t,” the children giggled.

(b) \*The children giggled, “We see something you don’t.”

(Banfield 1982: 47)

また、同じ例から、挿入語句は、*that* 節を補文とする構造から派生されるのではないということも明らかになる。最後に、COMP は、派生の途中で義務的に削除されるが、*so* や *thus* で埋められているので、Qやnegが生じることはない。このことから、挿入語句がQやnegをとらないことが説明できるとしている。

つぎに、問題点を考えてみよう。第一に、このモデルの最も重要な点はEという節点の導入であるが、その特徴がかならずしも明らかでない。(8)をみる限り、これは統語上の範疇の一つと考えられ、いわゆる root S に近い概念であろうと思われるが、別の観点からすれば、むしろ、言語運用に関与する節点であるとも考えられる。筆者は、後者の考え方に魅力を感じているのであるが、具体的にどのように統語的記述の中にそれを持ち込むかは、今のところ明らかでない。

第二に、(8a)では、上位のEの下に二つのEが並置されているが、COMP という節点は、 $S_i$  に対応するのであるから、二つのEを同じ高さに置くことには問題がある。第三に、*and*, *or*, *but* 等による等位構造は、(8)と同様に、二つ、または、それ以上のEが並置されることになるとと思われるが、もしそうなら、挿入語句との区別がつきにくくなる。等位構造と挿入語句との統語上の動きの違いはいうまでもない。第四に、COMP は、すでに *so* や *thus* で埋められているので、そこに Q や neg が生じないとし、これを利点と考えているようであるが、(10)の実例の存在により、これはむしろ弱点の一つといわれるべきであろう。

(10) (a) John hasn’t completed his book, I don’t think.

(b) Will John complete his book on time, do you believe?

(Emonds 1976: 56)

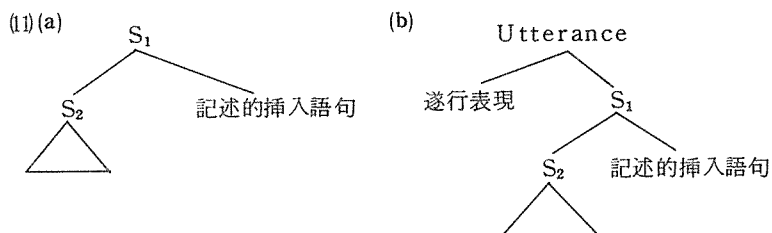
最後に、挿入場所の制限についての記述は不十分で、むしろ Emonds (1976)の方が欠点が少ない。

## 2.6. 提 案

以上の概観により明らかになった重要な点をまとめておこう。

- (i) Slifting のような変形規則では説明できない資料がある。
- (ii) Emonds (1976) は、挿入場所についての制約をある程度説明できるが、純粋に統語上の問題としてとらえようとしている点に問題がある。いいかえれば、挿入場所の制約を yes-or-no の possibility の問題としてとらえようとしているが、probability が関与する面にも注意を払う必要がある。さらに、このこととの関連で、特定の範疇のみを含む形式化では、実際の発話の多様性に対応できないといえる。
- (iii) Banfield (1982) では、節点 E が示唆的であり、慎重な検討に価すると思われるが、現在のところ、その性格は明らかでない。また、挿入場所の制約に関しては、Emonds (1976) に一歩譲っているといつてよい。

つぎに、筆者の試案をあげておく。



挿入語句は、遂行的挿入語句と記述的挿入語句に区別される。前者は、(11b)の「遂行表現」に含まれるものとする。(11a)は統語的な構造で、記述的挿入語句は  $S_2$  内の構成要素と種々の共起上の制限を持つ。したがって、記述的挿入語句は統語的な挿入語句といえる。(11a)が「言語運用部門」を通過すると、(11b)の構造が派生され、同時に、挿入場所について probability に基づいた情報が与えられるものとする。話し手が probability の高い挿入場所を選択したとき

には、無標性の度合の高い発話が生じ、その逆の場合は、特殊な効果を生じるような発話が作り出されることになる。このような観点に立つと、遂行的挿入語句は、言語運用面に関与する挿入語句であるといえる。

遂行的挿入語句は、伝達的タイプと心理的タイプに区分され、一方、記述的挿入語句は、責任転嫁的タイプと描出的タイプに区別される。

### 3. 挿入語句の特徴

3.1. 挿入語句の特徴については、いくつかの点が、断片的ではあるが、これまでに明らかにされている。

まず、意味的にいえば、挿入語句は、ある発話の主張を、話し手が、弱めたり、制限したり、また、発話の内容について、話し手の気持・判断などを付加するのに用いられる表現である。このことから、挿入語句の中に現われる動詞は、Lyons(1977: 738)や Wales(1981: 55)等の指摘のごとく、一人称単数現在が多い。

第二に、挿入語句は、統語上の肯定・否定と独立に、「肯定の意味(positive import)」を持つ(Jackendoff 1972: 97)。この事実は(12)により支持される。

$$(12) \text{ John is, } \left\{ \begin{array}{l} \text{I think,} \\ *I \text{ don't think,} \\ *I \text{ doubt,} \\ \text{I don't doubt,} \end{array} \right\} \text{ a fink.}$$

(Jackendoff 1972: 97)

第三に、Banfield(1982)によれば、挿入語句は、その機能から、談話(dis-course)挿入語句と叙述(narrative)挿入語句とに大別される。

以上の三点のうち先の二点は、筆者の用語を用いるとすれば、遂行的挿入語句の中の一部のみを扱っていることになる。また、第三の点は、挿入語句の分類で、それ自体重要なものであるが、それぞれのタイプの記述が十分でないように思える。筆者の分類との差異は個々のケースごとに言及される。

### 3.2. 挿入語句の分類

#### 3.2.1. 遂行的・伝達的挿入語句

(13) (a) I'll be right back in a moment, *I promise you*.

(b) What can we do, *I ask you*? [FR 117]

(13)の実例で明らかのように、挿入語句の動詞は、主節の人称・時制に関係なく、遂行・伝達動詞の現在形となる。主節の発話行為の責任者は、常に話し手で、主節の肯定・否定に関係なく、挿入語句の意味は肯定である。さらに、*I should say, I may say, Shall we say* 等法助動詞を含んだものも可能である。このタイプの挿入語句は、明示的に表面に現われるときとそうでないときとがあるが、話し手と聞き手の存在が常に想定されている。また、話し手や聞き手は、 $S_2$  内の同一指示の名詞を代名詞化<sup>③</sup>するひき金にはなるが、その逆の方向に変形がかかることはない。(11b)の「遂行表現」の位置は、この事実に基づいて、決められている。また、*between us, frankly* 等のように、動詞や主語を表面的に含んでいないような語句もこの中に入れられる。Banfield(1982)の分類によれば、このタイプは、談話的挿入語句の一つと考えられるが、談話的挿入語句の特徴、つまり、「話者の視点」では説明が困難であろう。

本稿で用いている「遂行的」という用語は、Ross(1970)のそれを下敷きにしたものではあるが、すでに指摘したごとく、<sup>④</sup>現在の時点でRoss(1970)の基本概念を生かすためには、統語論中心の考え方ではなく、言語運用面にも対応できるモデルの一部として再構成する必要があるといえよう。本稿での「遂行的」という用語は、このような考え方に基づいて用いられている。

#### 3.2.2. 遂行的・心理的挿入語句

(14) (a) Stafford Nye, *I gather*, has since been in South America with her. [FR 176]

(b) That's what they mean by improving the railways, *I suppose*. [FR 50]

---

③ 代名詞化を「変形」で考えるか、「解釈」で考えるかはここでは問題にしない。

④ 拙稿(1979)。

- (c) You did not, *I think*, go to the police of your own accord.  
[ABC 40]
- (d) But what did his colleagues think, *I wonder*, about his  
backing out? [FR 171]

(14)の例から明らかなように、挿入語句の主語は話し手、または、発話行為の主体で、動詞の時制は、主節の時制に関係なく現在形である。また、(14 c)にみられるごとく、主節が否定形でも挿入語句は肯定である。このタイプの挿入語句の中の動詞は、遂行的・伝達的なタイプと異なり、主節に対する話者の判断・評価・推測等心理的な状態と関係がある。

遂行的・伝達的挿入語句の場合は、話し手は聞き手の存在を前提しているが、遂行的・心理的挿入語句の方は、かならずしもそうではない。しかしながら、いずれも、挿入語句を用いている主体は、主節のそれと同一であるので、挿入語句がなくとも、主節の基本的な意味は損なわれない。このような事実から、このタイプも遂行的とよぶわけである。

なお、(15)のような例では、挿入語句は、時制を表わしていないし、いわゆる主語も持っていないのであるが、言語運用面からみれば、このタイプに入るべきものであろう。<sup>⑤</sup>

- (15) His brain, *in my opinion*, is as good as ever it was. [FR 179]
- (16) (a) Once, *you see*, she was in love with my grandfather.  
[FR 106]
- (b) *You know*, Japanese art is not directly about people, . . .  
[EJ 0705]

最後に、(16)の実例は、いずれも、挿入語句の主語は二人称で、時制は現在である。このタイプのものは、これまでの挿入語句の研究ではあまり扱われていないように思われるが、遂行的・心理的挿入語句の一つと考えられるべきであろう。

---

⑤ Banfield (1982 : 285f.) では、この種の句は、productivity が低い  
ため、基底で文頭に生じるとし、いわゆる挿入語句とは違った扱い方をしている  
が、その根拠は説得力がない。

### 3.2.3. 記述的・責任転嫁的挿入語句

- (17) (a) The Old Woman of the Mountain, *Sir Stafford Nye noticed*, did not drink anything. [FR 97]  
 (b) Elizabeth Barnard, *it could be guessed*, had considered herself a cut above Miss Higley. [ABC 55]  
 (c) But all the same, *he thought*, who is she? [FR 107]  
 (d) Crome, *I thought*, looked slightly annoyed. [ABC 52]

(17)のタイプの挿入語句は、遂行的タイプとはちがいで、動詞の時制は過去形、主語の人称に関しては制限はない。また、遂行的タイプが話し手と密接な関係をもっていたのに対し、このタイプは「主語」と密接な関係をもっている。したがって、しばしば、主語指向型の挿入語句とよばれる。Banfield (1982) の叙述挿入語句でも同様の説明が行われている。ところが、(17b)を観察してみると、統語的な用語である「主語」という表現では不都合が生じることがわかる。このような観点からすると、このタイプの挿入語句は、主節の内容について直接責任があるのは、話し手ではなく、挿入語句の発話上の主体であることを示しているといえる。(17a-c)において、挿入語句を除けば、主節の内容についての責任は話し手がとることになるが、挿入語句があると、挿入語句の発話上の主体が主節に関して責任をとることになる。また、(17d)では、現在の話し手のとるべき責任が、過去の話し手“I”に転嫁されているといえる。このような考え方により、「責任転嫁的」という表現を用いている。

### 3.2.4. 記述的・描出的挿入語句

- (18) John<sub>i</sub> will be late, he<sub>j</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} \text{thinks.} \\ \text{says.} \\ \text{tells me.} \end{array} \right\}$

(Banfield 1982: 87-88)

Banfield (1982) では、(18)は、談話挿入語句として扱われているが、談話挿入語句が「話者の視点」に関係するとなると、この実例は奇妙に思える。

筆者の基準で考えると、挿入語句の主語は *he* であるから、時制は現在形であ

っても、遂行的とはいえない。主節の *John* と挿入語句内の *he* が同一指示である点、また、(18)の基底には、“I will be late,” *John says*. 等という構造が考えられる点等を考慮して、これまでの三つのタイプと区別し、仮に、「描出的」という用語を与えておく。なお、(18)では、順行代名詞化が生じていると考えられ、また、逆行代名詞化も可能であることから、(11b)の「記述的挿入語句」の位置は妥当なものといえよう。また、この種の挿入語句挿入を、言語運用面の操作とみなすと、それ以後に代名詞化が適用されることになり、問題が残る。

### 3.2.5. 挿入語句としての呼格

呼格の生成については、つぎの二つの考え方に言及しておきたい。

第一は、Harada (1971) にみられるもので、Ross (1970) の遂行分析を發展させ、上位 S の与格に呼格の根拠を求めるものである。たしかに、Harada (1971) は Ross (1970) を改良しているので説明力は大きいが、いずれにしても統語論に視点を限定している。このことは、当時の一般的な考え方の流れからして無理のないこととはいえ、現在の時点では、やはり不満が残る。すでに述べたごとく、遂行分析に何らかの意義を見出すとすれば、それが、統語論と言語運用の接点に光を投げかける可能性があるという点であり、純粹に統語的な考え方に限定されているのなら、それ程魅力のある分析法とはいえないように思われる。

第二は、Banfield (1982) の考え方である。呼格は、E の書き替え規則の右辺の左端に ( $[{}_{+VOC}^{NP}]$ ) という形で派生される (*Ibid.*, 38)。つまり、すべての文構造の前に随意的な節点として派生されることになる。すでに述べたごとく、Banfield (1982) では、E という節点そのものの地位が明らかでない。

筆者は、呼格は、(11) の図によるならば、遂行表現の一つであると考えている。このことは、呼格が、話し手と聞き手とに直接関係をもつ項目であること、さらに、主節の中の構成要素と共起上何の制限も持たないということ、に基づいている。

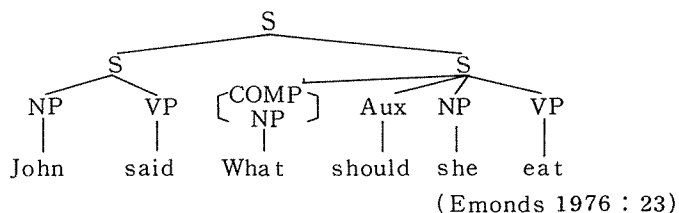
### 3.2.6. 直接話法の伝達部

直接話法の伝達部を挿入語句とする考え方には異論もあると思われるが、こ

では挿入語句の一つと考えておく。

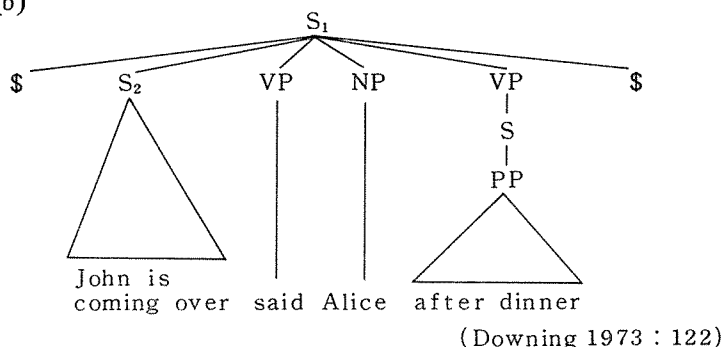
(19) (a) John said, “What should she eat?”

(b)



(20) (a) “John is coming over,” said Alice, “after dinner.”

(b)



上記の二つの解釈において、(19)の方では、伝達部は独立の構成要素Sにより支配されているが、(20)では、そのような構成要素はみられない。この限りにおいて、(19b)の方が(20b)よりも構造の特徴をよく表わしているといえる。が、もし、(19)の伝達部が(20)と同様に、主節の中に配置されたとすると、(19)の方式でも非常に奇妙な樹状図が必要となろう。

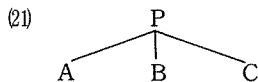
筆者の図式でいえば、この種の伝達部は、(11b)の記述的挿入語句の中に含まれ、責任転嫁的挿入語句の一つと分類される。なぜなら、もし、伝達部がなければ、発話の責任は話し手に課せられるが、伝達部が入ると、伝達部の発話上の主



体がその責任をとるからである。

#### 4. 挿入場所について

極く一般的にいて、構成要素の間は挿入語句が入りうる空間であるが、まったく無制限に入りうるわけではない。特に重要な点は、挿入が行われた場合、挿入された場所の右側の連続が構成要素を成していなければならないという制限が英語にはあるということである。



たとえば、(21)において、BとCの間の挿入は、右側の連続がCという独立の構成要素であるために、問題はない。ところが一方、AとBの間の挿入は、右側の連続BCが構成要素を成さないために、容認性の低い構造を生じることが多い。このことは、挿入語句の後の連続が焦点(focus)を成すという事実と無関係ではない。

(22) (a) Will you, *mademoiselle*, be precise?

(b) \*Will, *mademoiselle*, you be precise?

(23) (a) ?A donation, { *though it might be small,* } to their campaign fund would be preferred.

(b) They would prefer a donation, { *though it might be small,* } to their campaign fund.  
 { *small though it might be,* }

(Emonds 1976: 59)

(22a)では、(21)の記号を用いるなら、BとCとの間に挿入が行われているが、(22b)では、AとBの間に挿入されている。その結果、(22b)は非文となる。(23)の疑問符はEmondsの判断であるが、(23b)では、挿入語句——厳密には移動された節——の右側の連続が構成要素を成すので問題は生じない。一方、(23a)では、右側の連続は構成要素を成さない。しかしながら、主語のNPの中だけに

限定して考えると、右側の連続は構成要素を成すとみなすこともできる。このことが、(23a)を完全な非文にしなかった理由と思われる。かなり微妙な判定が必要とされるが、そのことは、(24)の文が実際の発話として生じていることで証明される。

(24) A tendency, *shall we say*, to rebellion shows up. [FR 77]

一般的に、構成要素の間は挿入語句が入りうる空間であるといえるが、樹状図を描いた場合、Sを含む上位の節点に支配された節点の左右の空間の方が、S以外の下位の節点の左右のそれよりも挿入語句を受け入れやすいという特徴がある。いいかえれば、Sを含む上位の節点に関係する空間への挿入の方が、S以外の下位の節点のそれより probability が高く、したがって、文体的に無標性の度合いが大きいといえる。このことに関しては、(25)の例を参照しよう。

(25) (a) \*He likes every,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{though they are poor,} \\ \text{poor though they are,} \end{array} \right\}$  friend of John.

(b) ?He likes,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{though they are poor,} \\ \text{poor though they are,} \end{array} \right\}$  every friend of John.

(c) He likes everyone,  $\left\{ \begin{array}{l} \text{though they are poor,} \\ \text{poor though they are,} \end{array} \right\}$  on that block.

(Emonds 1976: 59)

(25c), (25b), (25a) の順に容認性が低下することがわかる。しかし、実際に資料を調べてみると、(26a)のような実例があり、Emonds の判断のように yes-or-no で割切れるわけではない。また、(26b)によっても、この種の容認性の判断は微妙な側面を含んでいることがわかる。

(26) (a) It might be the sign, too, of an, *in some ways*, undeveloped mind. [ABC 177]

(b) They exchanged smiles over some item on the menu and apparently agreed that it would suit, for the patron took the card and with, *Bond guessed*, a final exchange about the wine, withdrew. [FL 157-8]

## 5. あ と が き

以上の議論の結論を要約しよう。

- (i) 挿入語句は、その特徴により、(11)におけるように、遂行的タイプと記述的タイプに大別される。遂行的タイプは、さらに、伝達的タイプと心理的タイプに、また、記述的タイプは、責任転嫁のタイプと描出的タイプに区分される<sup>⑥</sup>
- (ii) 挿入場所は、S 節点を含む上位の節点に近い程容認性が高く、S 以外の末端の節点に近い程容認性が低くなる。ただし、この容認性の度合は、連続したものであるので probability で記述する必要がある。したがって、(7)のように、範疇を指定するのは適当でない。

(昭和 57 年 11 月 22 日)

## BIBLIOGRAPHY

- Banfield, Ann (1982): *Unspeakable Sentences* RKP.
- Downing, Bruce T. (1973): "Parenthesization rules and obligatory phrasing" *PiL* 6, 1, 108-128.
- Emonds, Joseph E. (1970): *Root and Structure Preserving Transformations* IULC.
- (1976): *A Transformational Approach to Syntax: Root and Structure-Preserving Transformations* Academic Press.
- Harada, S.I. (1971): "Where do vocatives come from?" *English Linguistics* 5.
- Jackendoff, Ray S. (1972): *Semantic Interpretation in Generative Grammar* MIT.
- Lyons, John (1977): *Semantics II* Cambridge University Press.
- McCawley, James D. (1982): "Parentheticals and discontinuous

---

⑥ 挿入語句の特徴についての議論に関しては、種々の異論はあるが、大きな枠組については、Banfield (1982) に負うところが大きい。

constituent structure” *LI* 13, 1, 91-106.

Ross, John Robert (1970): “On declarative sentences” In Jacobs, Roderick A. and Peter S. Rosenbaum (eds.) (1970): *Readings in English Transformational Grammar* Ginn.

----- (1973): “Slifting” In Gross, M. *et al.* (eds.) (1973): *The Formal Analysis of Natural Languages* Mouton.

Wales, M.L. (1981): “Parataxis: A penthouse next door?” *Glossa* 15, 1, 53-82.

拙稿(1978): 「英語の遂行副詞と文副詞について」『学報』42(大阪外大).

……(1979): 「遂行分析と発話行為」『英米研究』11(大阪外大).

#### DATA

ABC: Christie, Agatha: *The ABC Murders* Pan.

EJ: *The English Journal* ALC.

FL: Fleming, Ian: *Casino Royale* Bantam.

FR: Christie, Agatha: *Passenger to Frankfurt* Fontana.

NIL: Christie, Agatha: *Death on the Nile* Fontana.

